

〔巻頭言〕

会長就任にあたって



平成30年度 会長 山田道夫†

このたび、2018年度の日本流体力学会の会長を務めさせていただくことになりました。今年は学会にとって設立50年の節目に当たります。過去を振り返り同時に未来を思い描くこの年に重責を与えられたことに身の引き締まる思いです。この1年、微力ながら学会や会員の皆様の活動に少しでも貢献できるよう尽力する所存です。ご支援をお願い申し上げます。

日本流体力学会の歴史は50年前の「流体力学懇談会」の設立まで遡ります。流体力学懇談会はすでに1956年から活動していたのですが、1968年10月1日に、同じ名称のまま、それまでの親睦団体的な集まりから学術団体としての組織に整備されました。これが今日の流体力学会の出発点です。これに伴いそれまで機関紙であった「流力ニュース」も会誌となり第2巻第1号からは「Nagare」という名称になりました。1960年代、日本は高度経済成長の時代にあつて、各地の大学には次々と理工系学部や研究所が新設され、同時にさまざまな学問領域の学会が発足しました。電子工学とその応用が急速に発展しつつある時代でしたが、インターネットなどはまだどこにも無く、研究者間の通信は郵便と電話、急ぎのときはテレタイプによって行われていた時代です。

当時、流体力学は、方程式の特異摂動解析など高度な応用数学的技術を駆使する分野として解析技術の卸元でもありました。しかし古典力学の古色蒼然としたイメージで、時代を象徴する電子工学や量子力学とは対照的だったようです。このような状況を反映してか、佐藤浩(東大宇宙研)、巽友正(京大理)、橋本英典(東大宇宙研)の3先生によって起草された『「流体力学懇談会」設立趣意書』には、戦後の航

空禁止令の後遺症としての研究人口の少なさ、研究機関の不足、研究将来計画の不在、研究者の士気、国際交流の5つが研究コミュニティの問題点として挙げられており当時の危機感と期待感が窺われます。

それから14年後、今から36年前の1982年1月1日、「流体力学懇談会」は対外的にもより強力な「日本流体力学会」に発展的に移行しました。学会移行の際には、学会誌を和文と英文のいずれの論文誌にするかという大きな議論がありましたが、和文論文誌で決着し今日の会誌の「ながれ」が同年5月に創刊されています。さらに1983年に京都で開催されたIUTAMシンポジウムも契機となり4年後の1986年には英文論文誌のFluid Dynamics Researchが創刊されました。今では流体力学分野の重要な専門誌に成長しています。普段の教育や研究の場では意識することが少ないのですが、学会の歴史を振り返ると、その時々厳しい状況の中、多くの優れた先輩の方々の大きな努力によって学会の発展がもたらされたことにあらためて思い至ります。特に、我々の知っている今の学会は、この半世紀を通じ、大きな努力によって時代の変化に対応し変貌を遂げてきた成果であることを心に銘記したいと思います。通じ、大きな努力によって時代の変化に対応し変貌を遂げてきた成果であることを心に銘記したいと思います。

流体力学は連続体の古典力学の中核をなす学問であり、同時に広大な適用範囲と工学的応用をもつ学問です。そのような性格を反映して流体力学会には、個々の分野における流体力学の深化と発展に貢献するとともに、多様な分野を横断的につなぐ機能を果たすことが求められています。分野が異なると、問題はもちろん、問題へのアプローチの仕方や用語までも異なることがあります。そこで個々の分野の状況を流体力学という共通言語で見直すことによって、問題の本質を明らかにし、それぞれの分野で用

*〒606-8273 京都府京都市左京区北白川追分町
京都大学 数理解析研究所

E-mail: yamada@kurims.kyoto-u.ac.jp

いられる手法同士を比較し、さらには分野を跨いで手法を移植することが期待されます。流体力学会の重要な意義は、流体力学を共通言語とする研究コミュニティの形成にあると考えます。計算機の発達とともに、流体力学が用いられる領域は急速に拡大しましたが、その広大な領域をつなぐ学会の役割は今後ますます重要になると思われま

す。現在、我が国の多くの学会がそうであるように、流体力学会もゆるやかですが会員数が漸減しています。人口の年齢構成の変化が主因とすればある程度避けようのないことですが、学会運営によってカバーできる余地もあり、充実した学会活動が重要な対策となることは間違いありません。直近の課題でいえば、年会講演会やシンポジウムにおけるセッション

の構成方法、流体力学会の賞の仕組みなどがあります。前者についてはテーマと手法のバランス、あるいは発表と議論のバランスが、後者については応募者の便宜と審査負担の軽減のバランスが、それぞれ大きな論点です。その他の大小の課題も含め、一朝一夕というわけには行きませんが、少しでもより良いものにできるよう尽力する所存です。先にも述べましたように今年度は学会設立 50 周年です。9 月の年会では、海外の著名研究者を招待しての 50 周年記念行事が予定されています。会員のみならず、流体力学の過去と現在を見渡して、これからの半世紀に思いを馳せる機会にさせていただければと思います。